日本語教育から見た日本語の指示詞表現(1)
－朝鮮語対訳から見た表現上の特徴－

深見兼孝

はじめに

本稿は、日本語教育から見た日本語の指示詞表現に関する研究の序論的位置づけとして、英語との比較で言われているような日本語の指示詞表現の特徴が、朝鮮語との比較においても言えるかどうかを確認することを目的とする。

1. 問題点

日本語の指示詞に関しては、日本語学の立場からも日本語教育の立場からも、従来いわゆるコ・ソ・アの別に多くの学問的努力が注がれてきたが、日本語の指示詞の持つ他の特徴、すなわち、その品詞的な性質、どのような存在を指示するかという存在論的意味に関しては、ほとんど議論がなかったように思える[1)]。しかしながら、品詞的な性質や存在論的意味に関しても十分な研究がないと日本語指示詞の全体的な理解にはつながらないのは勿論、日本語教育の観点からも「片手落ち」の感は免れないだろう。

このような状況の中で、池上(1982)や巻下・瀬戸(1997)は、日本語の指示詞を使った指示詞表現が英語のそれと異なっていることを指摘しており、注目される。池上(1982)は日本語が英語に較べ「輪郭をぼかす」表現をする傾向にあることを主張する中で、日本人の英作文でsuchの使用が多いことに英語人教師が驚いたというエピソードをあげ、thisやthatも「コレ・コノ」、「ソレ・ソノ」で訳すより「コノヨウナ（コト）」や「ソノヨウナ（コト）」で訳す方が自然な場合が多いとしている。巻下・瀬戸(1997)は日本語の表現が英語の表現に較べ状況依存的であることを主張する中で、日本語の指示詞が照応する語句が近くにないために、その意味を場面や文脈によって決めるしかなく、英語では指示詞表現をしない例を多数あげている。

池上(1982)の指摘は、日本語の指示詞がその存在論的意味の中心はおのおの一定であるにしろ、その使い方において英語より「融通が利く」ことを窺わせる。状況依存的な性格につながるものであろう。また、日本語の指示詞表現が状況依存的なら、指示詞とその修飾を受ける名詞の関係にもそのことが何らかの形で反映されると思われる。

以下では、日本語と類型的に近いと言われている朝鮮語との比較においても、日本語の指示詞表現の状況依存的な性格が現れるかどうかを見ていく[2)]。もし、朝鮮語との比較においても日本語の指示詞表現が状況依存的であるなら、それは日本語指示詞表現の特質である可能性が高く、品詞的な性質や存在論的意味に関して議論するさいに十分心に留めておかなければならないだろう。

2. 指示詞表現の削除

ここでは日本語の指示詞表現が朝鮮語では訳出されない場合を見る。日本語の指示詞は名詞や副詞として独立語の場合もあるし、連体詞として被修飾語である名詞を伴う場合もある。連体詞である場合、「指示詞＋名詞」全体が訳出されない場合も指示詞のみが訳出されない場合もある。

2-1　名詞または副詞としての指示詞

次の(1)aでは「ソレ」は先行する文に現れる「失敗した書物たち」、(2)aでは先行する節の表す出来事（「よう子の顔が私の躰内にいっぱいに膨れあが」ったこと）、またはその結果生じた「（私の躰内にいっぱいに膨れ上がったよう子の）顔」、(3)aでは先行する節の表す出来事（「言われ（て見）」たこと）を指示している。(2)aの「ソレ」を、先行する節の表す出来事の結果生じたものを指示すると解釈した場合、我々は先行する文脈にある情報だけに依存するのではなく、そこからさらに新たな情報（結果）を推論によって引き出していることになる。朝鮮語訳(1)b～(3)bでは日本語原文に該当する指示詞が存在しない。(1)bは１文になっているが、(1)bも(2)bも先行節の動詞は語尾-아/어서を取り、先行節と後行節は前提・結果の関係を結んでいる。(2)bは対応する指示詞がないという点を除いて日本語原文と並行した構造を取っていると言える。(3)bの先行節の動詞は語尾-니까によって後行節に対する理由を表している。(1)b～(3)bのいずれも先行節と後行節の主語は同一である。日本語原文に該当する指示詞が存在しないということは、翻訳家が不要だと判断したためであろう。確かに、同一主語の先行・後行節が前提（理由）・結果の関係にあるのなら、わざわざ先行節の内容（またはその一部）を指示詞でもって指示する必然性はないであろう。

(1)a 失敗した書物たちは、一箇所に集められ、荒縄で縛り上げられ、送り返されてきた。それは、堆く、私の眼の前に積み上げられていった。（鳥獣）

b 실패한 책들은 한 곳으로 모아져 거칠은 새끼로 묶여 반송되어 와서 내 눈앞에 무더기로 쌓여지고 있었다.

(2)a そのとき、私はよう子の顔が私の躰内にいっぱいに膨れあがり、それが、私と相手の女との通路を塞いでしまっていることに、気付いた。（鳥獣）

b 그때 요오꼬의 얼굴이 내 몸 속에 가득히 부풀어 올라서, 상대하고 있는 그녀와의 통로를 가로막아 버리는 것을 나는 깨달았다.

(3)a そんな時だけはまともに見えたが、言われて見れば、先刻来礼次ら二人が感じていた妙なわだかまりがそれで納得がいけるように思われた。（完全な）

b 그럴 때만은 제 정신 같았으나 얘기를 듣고나니까, 아까부터 레이지와 다께이 둘이가 느끼고 있던 묘하게 꺼림칙했던 일들이 비로소 납득이 가는 것 같았다.

次の(4)aでは「ソレ」は先行する節の表す出来事（「‥‥彼女の獣のにおいと、私の獣のにおいとがまじり合」ったこと）、またはその結果生じた「（彼女の獣のにおいと私の

獣のにおいがまじり合ってできた）におい」、(5)aでは先行する節の表す出来事（「‥‥俺たちがあの店へ女を迎えに行」くこと）を指示している。(4)aの「ソレ」を、先行する節の表す出来事の結果生じたものを指示すると解釈した場合、(2)aと同じことが言える。朝鮮語訳(4)b、(5)bでは、内容的に日本語原文の先行節に当たる部分を것により名詞化し、述語と格関係を結んでいる。(4)bでは主格成分、(5)bでは具格成分となっているが、いずれもこれらを指示詞で受ける余地はないであろう。翻訳家は指示詞の使用を避けるために日本語原文の構造を変えて翻訳したのであろうが、その理由はやはり朝鮮語では指示詞は不要だと判断したためであろう。

(4)a にわかに色濃くただよいはじめる彼女の獣のにおいと、私の獣のにおいとがまじり合い、それが彼女と私のあいだの架け橋となるのであろう。（鳥獣）

b 돌연 강하게 발산하기 시작하는 그녀의 동물적인 냄새와 나의 동물적인 냄새가 섞여 합치는 것이 그녀와 나 사이를 맺는 다리가 되는 것이리라.

(5)a 明日もう一度、ひと足違いで俺たちがあの店へ女を迎えに行って、それで何もかも完全に終りというわけさ（完全な）

b 내일 다시 한 번, 길이 어긋난 우리가 그 가게로 여자를 맞으러 가는 것으로 모든 것이 완전히 끝난다. 이렇게 되는 거지

以上の例の日本語の指示詞は朝鮮語としては不要、言い換えれば剰余的であると判断されたのであろうが、述語と直接的な文法関係を結んでいる。(1)a、(2)a、(4)aでは主語であり、(3)a、(5)aではデ格におかれている。一方、次の例では日本語の指示詞は述語と直接的な文法関係を結んでいない。述語と直接的な文法関係を結ばない要素はその文の解釈に貢献する度合いが低いであろう。すなわち、情報的に剰余性が高いと言える。そのために朝鮮語訳(6)b、(7)bでは指示詞が訳出されていないのであろう。なお、(6)aの「ソレ」は直前の文の表す内容を指示していると考えられるのに対し、(7)aの「ソレ」はそうではない。(7)aの「ソレ」は「たまに恋愛する人間」あるいは「たまにある恋愛」のことであろうが、これは直前の文には現れておらず、その内容をいわば加工したものである。

(6)a 面白いわよ。人間の顔を、毎日たくさん眺めるのは。それは、厭なこともあるけど、そんなことは、大したことはないわ（鳥獣）

b 재미 있어요. 인간의 얼굴을 매일 바라다보는 것은요. 가끔 싫을 때도 있지만 그건 그리 대단하진 않거든요.

(7)a そりゃ、恋愛する人間も無いではありません。しかし、それは相手がみんな近在の百姓の娘なのです。（一年半）

b 하기야 연애하는 사람이 없진 않습니다. 그러나 상대방은 모두 근처에 있는 농가의 딸입니다.

次の例の「‥‥」は筆者の任意の省略を示す。(8)a、(9)a、(10)aの「ソレ」を解釈するためには「‥‥」の直前の文まで数文遡らなければならないようにも見えるが、それだけ

の労力が必要な指示詞を作家が敢えて使用するとは考えにくい。また、仮にそうやったとしても(8)a、(9)aの「ソレ」が正確に何を指示しているかを言うことは難しい。むしろ、これらの「ソレ」は、物語や会話のまとまりを維持するための、いわば「印」としてのみ機能していると言った方が当を得ているように思える。すなわち、「ソレ」を含む文が脈絡上独立しているのではないことを示しているのである。物語や会話のまとまりを維持するためだけの指示詞は情報の上では剰余的である。朝鮮語訳(8)b、(9)b、(10)bで指示詞が訳出されていないのはそのためであろう。

(8)a 「須村さと子さんに、何か生理的な関連はなかったのですか？」‥‥そして、それは当時の裁判記録を読んで、犯行時が彼女の生理日ではなかったことを思い出した。(一年半)

b 「스무라・사도꼬상에게 어떤 생리적인 관련은 없었을까요?」……그리고 당시의 재판 기록을 봐도 범행시가 그녀의 생리일이 아니었음이 생각에 떠올랐다.

(9)a 「私は、須村要吉の友人をちょっと知っているのですが、その友人の話によると、要吉は前々から、そう、一年半ぐらい前から、女房がちっともいうことをきいてくれないといって、こぼしていたそうです。‥‥」‥‥「‥‥それは要吉が、情婦のところへ通うから、さと子さんが拒絶していたのではないですか？」(一年半)

b 「저는 스무라・요오끼찌의 친구를 좀 압니다만, 그 친구의 말에 따르면, 요오끼찌는 훨씬 전부터, 아마 1년 반쯤 전부터 아내가 전연 말을 들어 주지 않는다고 불평하고 있었답니다.……」……「……허기야 요오끼찌가 정부를 찾아다니니까 사도꼬상이 거절하고 있었던 것이 아닐까요?」

(10)a 「さと子さんが要吉君に金を与えて、静代の店に行かせていたということです。‥‥」‥‥「じゃあ、それは彼女の寛大な気持ちから出発したと考えてもいいです」(一年半)

b 「사도꼬상이 요오끼찌군에게 돈을 주어서 시즈요 가게로 술을 마시러 보냈다는 사실입니다.……」……「그렇다면 그녀의 관대한 마음에세 출발했다고 생각해도 좋습니다」

以上、日本語の指示詞が剰余的と思われる理由によって朝鮮語では翻訳されない例を見てきた。これらの指示詞は品詞的には名詞であったが、副詞としての指示詞についても同じ理由によって朝鮮語に翻訳されていないと思われる例がある。次の(11)aの「ソウ」は直前の「ごめんなさい」を指示しているが、これはあまりにも自明である。また、(12)aの「コウ」は逆に漠然とそのときの状況を指している。どちらも情報の上からは剰余的である。そのために朝鮮語訳(11)b、(12)bでは指示詞が訳出されないのであろう。

(11)a 「ごめんなさい」と、彼女は、私の表情をみて、そう言った。(鳥獣)

b 「미안합니다」하고 그녀는 내 표정을 보면서 말했다.

(12)a 独りだから、こうして働いているのだと須村さと子さんは微笑しながら主張しまし

た。（一年半）

b 홀몸인 때문에 돈벌이에 나서는 것이라고 스무라・사도꼬상은 웃으면서 얘기하더군요.

2-2 連体詞としての指示詞

まず「指示詞＋名詞」全体が訳出されない場合を見る。(13)aの「ソノこと」の「こと」自体に具体的な意味はなく、「ソノこと」全体で先行する文の表す内容（「椅子の上の彼女は私にとって、いつも、椅子の上にうずくまる石膏色のかたまりである」こと）を指示している。朝鮮語訳(13)bは構造的に先行節の動詞が語尾-아/어서を取り、先行節と後行節は前提・結果の関係を結んでいる。指示詞が現れる余地はないであろう。一方(14)aは主人公が相手の女性の胴体部分に手で様々に接触している場面に現れた文である。朝鮮語訳(14)bでは動詞비틀다（ねじる、ひねる）の目的語が現れていないが、この文脈からその対象が何であるかは自明である。どちらの場合も、翻訳家が日本語原文の「指示詞＋名詞」が朝鮮語としては剰余的であると判断したのであろう。

(13)a しかし、椅子の上の彼女は私にとって、いつも、椅子の上にうずくまる石膏色のかたまりである。そして、そのことは、私を他の場合のように当惑させはしない。（鳥獣）

b 그러나 의자에 앉아 있는 그녀의 모습 역시, 나에게는 뿌연, 한 석고색의 덩어리에 불과해서 다른 경우와 마찬가지로 나를 당혹시키지는 못했다.

(14)a その胴をねじってみたり、（鳥獣）

b 비틀어도 보았다.

次は「指示詞＋名詞」の指示詞の部分のみが訳出されない例である。これらの例における指示詞は、その被修飾語である名詞が特定の（人）物を指すこと以外にほとんど情報を付け加えていない[3]。しかもその定性でさえ指示詞がなくても文脈から理解できる。やはり剰余的と言うべきであろう。朝鮮語訳では指示詞が訳出されていない。

(15)a 一方に心が傾くにつれ、この夫からの解放を、彼女は望みました。（一年半）

b 한쪽에 마음이 쏠릴수록 남편에게서 해방되기를 원했습니다.

(16)a 彼女は、陸に引上げられた鱶のように、その躯を波立たせる。（鳥獣）

b 그녀는 물 밖으로 끌어 올린 상어처럼 몸뚱이를 꿈틀거린다.

(17)a ある日、私の部屋に、会社のあの女性が訪ねてきた。（鳥獣）

b 어느 날, 내 방에 회사에 있는 여자가 찾아 왔다.

次の例でも「ソンナ」は「夫婦関係」がどのような「夫婦関係」であるかに関して情報をほとんど与えていない。やはり剰余的と言うべきであろう。朝鮮語訳では指示詞が訳出されていない。

(18)a それで、若かすると、須村さと子さんの方に、そんな夫婦関係の出来ない生理上の

支障があったのではないか、と思ったのですが　（一年半）

b 그래서 어쩌면 스무라・사도꼬상쪽에 부부관계를 못할 생리상의 지장이 있지나 않았던가, 이렇게 생각해 보았는데요.

3. 一般語句への翻訳

ここでは日本語の指示詞表現が朝鮮語では指示詞ではない一般語句に翻訳された場合を見る。日本語の指示詞は名詞の場合もあるし、連体詞として被修飾語である名詞を伴う場合もある。連体詞である場合、「指示詞＋名詞」全体が一般語句に翻訳される場合も指示詞のみが一般語句に翻訳される場合もある。

3-1　名詞としての指示詞

次の(19)aの「コレ」は朝鮮語訳(19)bでは사건（事件）となっている。筆者の素朴な直感では、単に「事件」として名詞的に捉えられたものではなく、被告の結婚から夫の浮気、自分や子供に対する暴力、夫殺しから逮捕、取り調べに至るすべての出来事を指示しているように思える。これは先行文脈の特定の部分と照応しているわけではなく、翻訳家は日本語のように朝鮮語で指示詞を使用すると、それが何を指示しているか理解されにくいと判断したものと考えられる。(20)aの「ソレ」は(20)bでは여인（女）と翻訳じてある。やはり筆者の素朴な直感では、単に「女」として名詞的に捉えられたものではなく、「女」が「びくりともせずに同じ格好で倒れてい」る状況を指示していると思われる。「ソレ」は本来存在論的意味が＜モノ＞である上に、対物動作を表す動詞「横にする」、「起こす」の目的語になっているにもかかわらず、である。そのために翻訳家は「横にする」、「起こす」を朝鮮語に翻訳する一方でその目的語として指示詞を使用するとそれが何を指示しているか理解されにくいと判断し、一般語여인（女）と翻訳したのであろう。これに対し、日本語原文の指示詞の解釈は、物語に描かれた状況に極めて依存したものと言うことができよう。

(19)a これが公判に回ると、更に同情はたかまった。（一年半）

b 사건이 공판에 회부되자 동정은 더 높아졌다.

(20)a 男が、終わって仲間と代ろうとする間も、女はびくりともせず同じ格好で倒れていた。誰かがそれを横にしたり起したりさせようとしても、女はゆるんだ何か重い荷物のように仰向けに延びたままだった。（完全な）

b 한 사나이가, 마치고 나서 같은 패거리가 바꿔치려는 동안에도, 여인은 꼼짝달짝 않고, 여전한 자세로 쓰러져있었다. 누군가가 여인을 옆으로 뉘고 일으켜 세우려 들었으나, 여인은 축 늘어진, 무슨 무거운 짐짝이나처럼 천장을 향하여 쭉 뻗은 채로였다.

3-2　連体詞としての指示詞

まず「名詞＋指示詞」全体が一般の語句に翻訳された例を見てみる。(21)aの「コノ格好」

は(21)bでは옷（服）と翻訳されているが、発話時の状況からそのように解釈される。また、(22)aの「ソノ人」も直前の「保険勧誘」から「保険勧誘をする人」という解釈がでてくる。朝鮮語訳(22)bでは외교원（外交員）となっている。「ソノ人」が誰であるかを直接表す言語的要素は存在しない。

(21)a おい、この格好なんとかしろよ　（完全な）

b 이봐, 옷 좀 추스르지 그래

(22)a 保険勧誘も、その人の魅力が、大部分作用しますからね。（一年半）

b 보험권유도 외교원의 매력이 크게 작용할 테니까요.

次は「指示詞＋名詞」の名詞は勿論、指示詞の部分も一般の語句で訳出される例である。(23)aの「ソノ後」の「後」はおそらく「うしろ」で、「ソノ後」は「礼次の後」というより、「礼次」が「部屋を出て台所へ水を飲みに歩いていった後」であろう。日本語はこのような状況的な解釈が自然なように思える。朝鮮語訳(23)bでは등뒤（背後）となっており、モノ的な解釈がなされている。(24)aの「ソノこと」は前文の内容、すなわち「私が彼女の躯を知っていること」であるが、(24)bではその内容がそのまま翻訳されている。(25)aの「ソノ通りに」は直前の「岡島はうなずいた」から岡島がはっきりと答えなかったことを推論しなくては解釈ができない。朝鮮語訳(25)bではその推論の部分が글쎄요 하고, 대답한 그대로（そうですね、と答えた通り）と明示されている。

(23)a 礼次は部屋を出て台所へ水を飲みに歩いていった。その後で、女が何か叫んだ後、また武井が殴りつけるばしっという鈍い音が聞こえて来る。（完全な）

b 레이지는 방을 나서자 부엌으로 물을 마시러 걸어갔다. 등뒤에서 여인이 뭐라고 외친 뒤, 또 다께이가 손찌검하는 소리가 <철썩>하고 둔하게 들려 온다.

(24)a 私は彼女の躯を知っている。会社の部屋の中で、私は石膏色のかたまりを見る眼つきでしか、彼女を眺めないので、誰もそのことに気づかない。（鳥獣）

b 나는 그녀의 몸뚱어리를 알고 있다. 사무실 안에서 나는 그녀를 석고색의 덩어리로 보는 이외에 달리 여기고 있지 않기 때문에, 아무도 내가 그녀의 몸뚜이를 알고 있다는 사실은 눈치채지 못하고 있는 것이다.

(25)a 岡島はうなずいたが、その通りに、よく分らないといった顔つきだった。（一年半）

b 오까지마는 고개를 끄덕였지만 글쎄요 하고, 대답한 그대로 이해가 안 간다는 얼굴 표정이었다.

以上、日本語の指示詞表現はその意味を酌んで朝鮮語でより明示的に翻訳されている。逆に日本語の指示詞表現の解釈はそれだけ状況に依存する部分が大きいと言えよう。以下の例では日本語の指示詞が人を表す用法に転用された指示詞、または「指示詞＋人を表す形式名詞」で翻訳されているが、「人」の方が認知しやすい。その意味で日本語の指示詞表現は朝鮮語でより明示的に翻訳されていると言えよう。

(26)a 次の瞬間、私は腕を彼女の片方の腕にからませ、その小さな躯を引立てるようにし

て歩きだした。（鳥獣）

b 다음 순간 나는 팔을 그녀의 한쪽 팔에 감은 채, 그녀의 작은 몸을 잡아당기듯이 하고 걸어갔다.

(27)a そうだ。あの顔には、死相があった。（鳥獣）

b 그렇다. 그의 얼굴에는 죽어 있는 모습 같은 것이 엿보였다.

(28)a あの澄み切った瞳は純真そのものです。（一年半）

b 그녀의 맑게 빛나는 눈동자는 바로 순진 그대로고.

4. 名詞の添加[4)]

次の例では日本語原文の指示詞が朝鮮語で「指示詞＋名詞」に翻訳されている。(29)bでは지경（様子）、(30)bでは모양(들)（模様）、(31)bでは점（点）が指示詞の被修飾語となっている。これらの名詞を添加することで朝鮮語の指示詞表現の情報の精度が上がっていると言えよう。相対的に日本語原文の指示詞は情報の精度が低く、その分解釈を物語の状況に依存しなければならない。

(29)a あれで自殺でもされたら店が大迷惑だから、他に身元も知れないので、紹介した高木に一応女を出来るだけ早く引き取って欲しいということだったが、（完全な）

b 그 지경이니 자살이라도 하는 날에는 가게가 크게 난처해지겠고, 또 달리는 신원도 알 수 없곤 하여, 소개한 다까기가 일단, 여인을 될 수 있는 대로 빨리 맡아 갔으면 좋겠다는 얘기였다.

(30)a それらは、それぞれ、なにかの鳥や獣や虫や魚の形に似てはいるのだが、（鳥獣）

b 그래서 그 모양들은 제각기 무슨 새나 짐승이나, 혹은 무슨 벌레나 물고기 모양과 흡사해져서

(31)a それは断言出来ます。（一年半）

b 그 점은 단언할 수 있어요.

同様のことが次の例でも言える。(32)aの「ソコ」は先行文脈の表す「男たちが殺伐とした雰囲気で、寂しく働いている」という状況を指示するのか、「工事現場」という＜場所＞を指示するのかはっきりしない。しかし、翻訳家は곳（所）を指示詞に添加することで場所（工事現場）の解釈を行っている。はやり、朝鮮語の指示詞表現に比べて、日本語の指示詞表現は情報の精度が低いと言えよう。

(32)a そこに現れたのが、保険勧誘に、はるばる東京から来た須村さと子さんと藤井さんという女の人です。

b 이런 곳에 나타난 것이 보험외교원으로 먼 동경에서 온 스무라・사도꼬상과 후지이상이라는 여자입니다.

5. 輪郭のぼやけた指示物

前節の最後に出した例(32)を(33)としてもう一度あげる。朝鮮語訳では日本語原文の「ソコ」が「工事現場」という<場所>に解釈されているのだが、「男たちが殺伐とした雰囲気で、寂しく働いている」という状況がその「工事現場」にある。朝鮮語で이런という<様態>を意味する指示詞が用いられているのはそのためであろう。

(33)a そこに現れたのが、保険勧誘に、はるばる東京から来た須村さと子さんと藤井さんという女の人です。（鳥獣）

b 이런 곳에 나타난 것이 보험외교원으로 먼 동경에서 온 스무라・사도꼬상과 후지이상이라는 여자입니다.

次の例でも、「コノ辺」には「近くに人家もない」という状況があることが示されている。朝鮮語では(33)bと同じように이런が用いられている。

(34)a 一体こんな時間、近くに人家もないこの辺で、女が今まで何をしていたのか見当がつかない。（完全な）

b 도대체 이런 시간에, 근처에 인가도 없는 이런 곳에서, 여인이 지금까지 무엇을 하고 있었는지 짐작이 안 간다.

このように、朝鮮語では日本語に比べ、状況的意味合いが感じられることろでは<様態>を意味する指示詞を用いる傾向がある。

次の(35)aの指示詞「ソノ」の修飾を受ける「疑い」はそもそも意味的に命題の存在を、(36)aの「仕事」は人の活動を前提とし、(37)aの「つもり」、つまり「意図」は人の動作の前提となる。このように、日本語原文では命題や人の活動・動作と意味的に密接な関係のある名詞が指示詞の被修飾語となっているが、朝鮮語訳(35)b、(36)b、(37b)では<様態>を意味する指示詞がそれぞれ의심（疑い）、일（仕事）、의도（つもり、意図）を修飾している。命題や人の活動・動作はコトであるので、朝鮮語では<様態>を意味する指示詞を用いるのが適当だと判断したのであろう。一方、日本語は、状況的意味合いが感じられるかどうか、または被修飾語が意味的にコトと密接な関係があるかどうかと、<様態>を意味する指示詞を用いるかどうかとは、朝鮮語ほどの相関性を持たないと言えよう。

(35)a しかし、そのような彼女が、なぜ時折、私の部屋に訪れてきたのだろうか。その疑いが、かえって私と彼女のつながりを保った。（鳥獣）

b 그러나 이같은 그녀가 왜 때때로 내 방을 찾아왔을까? 이런 의심이 오히려 나와 그녀와의 관계를 지속시켰다.

(36)a われわれは学校を出て、好きでこの仕事に入ったのですが、山から山を渡り歩いていると、さすがに都会が恋しくなります。（一年半）

b 우리들은 학교를 졸업하고 좋아서 이런 일에 뛰어들었지만 산에서 산으로 떠돌아 나니고 있으면 정말 도회지가 그리워집니다.

(37)a じゃ、さと子さんに、矢張りはじめからそのつもりがあったというのですか？（一

年半)

b 그럼 사도꼬상에게 역시 처음부터 그런 의도가 있었다는 말씀 같은데?

以上の例では、日本語原文の指示詞表現は状況的意味を帯びていると言うことができよう。状況的意味を帯びているならそれだけ指示物の輪郭はぼやける。言い換えれば、日本語指示詞表現は本来の指示物より輪郭のぼやけた物を指示する傾向があるのである。このことは、2〜3節にあげた日本語原文の指示詞が本来<もの>を表すにもかかわらず、先行文脈の表す出来事を指示している例が多数あり、さらにいくつかの例では推論などにより先行文脈から新たな情報を引き出す必要があったことからも裏付けられる。

このように、日本語の指示詞表現は指示詞の本来的な存在論的意味から逸脱した用いられ方をすることが多い。また、本節で示したようにその被修飾語である名詞のコト的な意味に拘束されにくい。いずれも、日本語の指示詞表現が状況依存的であることに由来するものと言えよう。

おわりに

日本語の指示詞表現が朝鮮語との比較においても状況依存的であることは疑いないように思える。その剰余的な用いられ方も状況依存的な性格があるために許容されるのであろう。前節の終わりで、日本語の指示詞表現は指示詞の本来的な存在論的意味から逸脱した用いられ方をすることが多く、その被修飾語である名詞のコト的な意味に拘束されにくいと述べたが、今後はどの程度そうなのかを調べる必要がある。さらに、それが日本語指示詞を学習するさいの困難とどのような関係があるかを明らかにしなければならないだろう。

注

1) 日本語と朝鮮語の指示詞は、品詞的性質、存在論的意味、指示物の話者からの距離に基づいて、次のような体系を考えることができる。朝鮮語の<様態>を表す指示詞は指示形容詞（または動詞）と言うべきものであり、語幹のみを示した。また、김상대(2001)のように朝鮮語の指示詞から<場所>以外の名詞的性質を持っているものを排除する主張もあるが、標準的な考えに従った。なお、厳密に言えば、副詞이리, 그리, 저리は<様態>も表す。

［日本語の指示詞の体系］

品詞	名詞				連体詞		副詞	
存在論的意味	もの	場所	方向		位置	様態		
話者からの距離								
話し手に近い	これ	ここ	こちら	こっち	この	こんな	こんなに	こう
聞き手に近い	それ	そこ	そちら	そっち	その	そんな	そんなに	そう
両者から遠い	あれ	あそこ	あちら	あっち	あの	あんな	あんなに	ああ

［朝鮮語の指示詞の体系］

品詞	名詞			冠形詞	副詞	形容詞（動詞）
存在論的意味	もの	場所	方向	位置	方向	様態
話者からの距離						
話し手に近い	이것	여기	이쪽	이	이리	이렇-
聞き手に近い	그것	거기	그쪽	그	그리	그렇-
両者から遠い	저것	저기	저쪽	저	저리	저렇-

2) 以下のような日本語の小説とその朝鮮語訳を資料とした。（ ）内は略号である。

- 石原慎太郎『完全な遊戯』 新潮文庫 新潮社1978年（24刷）（完全な）／申東漢『完全한 遊戯』 日本短篇文學全集Ⅵ 新太陽社 1974年
- 松本清張『一年半待て』 松本清張短編総集 講談社1971年 （一年半）／表文台『一年半 기다려 주세요』 日本短篇文學全集Ⅴ 新太陽社 1974年

・ 吉行淳之介『鳥獣虫魚』 小田切進（編）『日本の短編小説』昭和（下） 潮文庫 潮出版社1977年（2刷）（鳥獣）／吳成鎭『鳥獣蟲魚』 日本短篇文學全集Ⅵ 新太陽社1974年

日本語の小説とその朝鮮語訳を資料にしたのは、両言語の口語に基づいた多様な表現を採集するためであるのと同時に、日本語と類型的に類似している朝鮮語への翻訳において、翻訳家が直訳しなかったところが両言語の深い所にある差異に由来する可能性が高いと推測したからである。もちろん、翻訳者の個人差によって、あるいは同じ個人であっても一貫した翻訳がなされるとは限らないので、このような翻訳を用いた表現の分析から拘束力の強い規則、つまり文法を発見することは期待薄である。むしろ、いわば緩やかな規則ないしは傾向を見出すのに適していると思われる。本稿にはそれで十分である。

3) これらの指示詞は情意的なニュアンスも含むが、朝鮮語で訳出されていないことろを見ると、それは重視されていないのであろう。このニュアンスは本来的な指示物の<距離>と物語に描かれた状況に由来するので、その意味でも日本語の指示詞表現がより状況依存的であると言える。

4) 次のように、日本語原文の「指示詞＋名詞」が朝鮮語で指示詞のみで翻訳されるもある。これは現象的にはこの節で述べることと逆であるが、問題の名詞が実質的意味をほとんど持たないことに注意されたい。

・ a いや、あるいは彼らは依然として人間の形のまま、部屋のあちこちの空間を占めており、私自身の方がなにかわけのわからぬものに変形しているのかもしれなかった。そこのところが、私には、よく捉えることができないのだ。その事情は、私が街ですれちがう人間たちに関しても、同様のことである。（鳥獣）

b 아니, 어쩌면 그들이 의젓한 인간의 모양으로서 실내의 여기저기 공간을 차지하고 있고, 내 자신이 무엇인가 알 수 없는 모양으로 둔갑하고 있는 것인지도 모른다. 하여간 나로서는 잘 분간할 수 없는 일이지만, 이것 역시 내가 거리에서 만나 엇갈리는 사람들한테서 느끼는 현상과 같은 것이었다.

・ a それは、厭なこともあるけど、そんなことは、大したことはないわ （鳥獣）

b 가끔 싫을 때도 있지만 그건 그리 대단하진 않거든요

言及した文献

池上嘉彦(1982) 「表現構造の比較」：國弘哲彌（編）『日英語比較講座 第４巻発想と表現』p.69－110 大修館書店

巻下吉夫・瀬戸賢一(1997) 『文化と発想とレトリック』：中右実（編）『日英語比較選書』4 p.59－77 研究社出版

김상대(2001) 『국어문법의 대안적 접근』p.175－193 국학자료원